

コリントの信徒への手紙二 ガラテヤの信徒への手紙

通 読

12月



(12月30日)「ガラテヤの信徒への手紙6:7~10」

たゆまず善を行きましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります。
(ガラテヤの信徒への手紙6章9節)

・「たゆまず善をおこなう」、言葉では簡単に言えますが、実行するとなるとなかなか大変なことです。「一日一善」という言葉があります。一日に一回善をおこなうだけでも目標になるのに、「たゆまず」となると一日何善になるのでしょうか。

・ただこれは当然、何回かという回数の問題ではありません。そのような思いで生活しましょう、悪から離れて生きていきましょうということです。わたしたちの世界を見ると、善い人が損をする、そのように見えることもあるかもしれません。

・しかし神さまは、いつもわたしたちのことを見ていてくださいます。なかなか実を結ばないことで飽きてはいけません。わたしたちのおこないが天に宝を積んでいることを信じ、歩むことができればと思います。

(12月31日)「ガラテヤの信徒への手紙6:11~18」

このとおり、わたしは今こんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。
(ガラテヤの信徒への手紙6章11節)

・パウロはここまで、口述筆記によってこの手紙を書いていました。目がよく見えないパウロは自分の力で小さな文字を書くことができず、誰かの助けを受けて代わりに書いてもらっていたのです。

・ところがここから、パウロは自筆で書き出します。それはこの手紙の最後に書かれることを、本当に伝えたいという熱い思いからなされたことでしょう。目がよく見えない彼の字は、とても大きくなりました。それは彼のガラテヤの人々に対する愛の大きさと比例しています。

・「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです」と語るパウロの言葉は、わたしたちに何を伝えているのでしょうか。わたしたちもイエス様の十字架のみを誇り、歩むことができればと思います。来年は一緒に「詩編」をお読みしましょう！

(12月1日)「コリントの信徒への手紙二12:11~13」

あなたがたが他の諸教会よりも劣っている点は何でしょう。わたしが負担をかけなかったことだけではないですか。この不当な点をどうか許してほしい。
(コリントの信徒への手紙二12章13節)

・パウロは、「わたしは愚か者になってしまいました」と語ります。パウロは神さまによって与えられた素晴らしい体験を語る必要性を感じました。しかしそれは、コリントの人たちから自慢をしているように見られるかもしれないと感じたようです。

・パウロはまた、「大使徒たち」に自分は引けを取っていないとも語ります。12弟子はイエス様に直接、権能を与えられました。しかしパウロにも同じ力が与えられていたことは、聖書からも想像できます。

・そしてパウロは、自分がコリントの人たちから報酬を受けなかったことで、かえって負担を掛けてしまったのだと考えているようです。働きに応じた報酬は、やはり必要なのだということでしょうか。

(12月 2日)「コリントの信徒への手紙二 12:14~18」

そちらに派遣した人々の中のだれによって、あなたがたをだましたでしょうか。
(コリントの信徒への手紙二 12章 17節)

- ・パウロはコリントの教会への三度目の訪問について語ります。彼が訪問するのに「負担をかけない」と言っているのは、パウロが利益を得るためではなく、あくまでも信徒たちが霊的に成長するためだということです。
- ・ただコリントの人たちの中からは、パウロが集めたエルサレム教会への募金について、疑惑の目が向けられていたようです。今と違って振り込みの証明や領収書があるわけではないので、信用によってのみ成り立っていたと思います。
- ・教会においても、会計に対して疑惑の目が向けられることがあります。ある意味大切なことではありますが、会計担当者や教会委員会、そして牧師を信用していただけたらとも思います。パウロも疑惑の目で見られることは、とても悲しかったことでしょう。

(12月 3日)「コリントの信徒への手紙二 12:19~21」

あなたがたは、わたしたちがあなたがたに対し自己弁護をしているのだと、これまでずっと思ってきたのです。わたしたちは神の御前で、キリストに結ばれて語っています。愛する人たち、すべてはあなたがたを造り上げるためなのです。
(コリントの信徒への手紙二 12章 19節)

- ・パウロのコリント訪問の目的は、コリントの人たちの霊的な養いに尽きます。しかしこのままでは、お互いの期待とは外れた現実に失望し、かえって混乱するのではないかとパウロは心配します。
- ・「期待していたけれども、会ってみると思ったのとは違った」ということは、わたしたちの生活の中でもよくあることです。それは想像の中で理想が大きく膨らんでしまうからでしょう。
- ・それと同時に、「どうせここには来ないだろう」と安心しきって墮落することもあるでしょう。コリントの人たちが、そうでした。そのような中では、久しぶりに出会えた喜びよりも、失望が上回るのです。

(12月 28日)「ガラテヤの信徒への手紙 5:22~26」

わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。

(ガラテヤの信徒への手紙 5章 25節)

- ・昨日の箇所ではパウロは、「肉の業」を列記しました。それに対して霊の実は何なのかを書き記します。それは、「愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」であるということです。
- ・今年も残すところ、今日を入れてあと四日となりました。「来年、わたしは喜びに満ちた一年を目指す」、「わたしは周りの人に対して柔和でありたい」、そのような目標を決めてもよいのではないのでしょうか。
- ・イエス様はわたしたちの肉の思いも一緒に、十字架につけてくださいました。そのことを信じ、霊の導きによって歩いていくことができればと思います。互いに支えあい、喜びながら歩いていく教会になればいいですね。

(12月 29日)「ガラテヤの信徒への手紙 6:1~6」

互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。

(ガラテヤの信徒への手紙 6章 2節)

- ・ガラテヤの信徒への手紙もついに最終章に入ります。パウロがガラテヤの人々に最後に伝えようとしたのは、「お互いに助け合うこと」です。罪に陥った人がいたらどうしたらいいか、そして重荷を負っている人がいたらどうしたらいいかということです。
- ・誰かが罪を犯したとき、その罪を糾弾し、その人を共同体から排除していくことはとてもたやすいことです。そうすることによって、共同体も守られるでしょう。しかしパウロはそうではなく、「立ち帰らせなさい」と命じます。
- ・そのためには、罪を犯した人とも共に歩いていくことが大切なのです。重荷を互いに担いあうことも同じです。教会の中だけを安心・安全にするのではなく、罪の中でもがきながら、一緒に生きていくことが求められているのではないのでしょうか。

(12月 26日)「ガラテヤの信徒への手紙 5: 7~15」

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。

(ガラテヤの信徒への手紙 5 章 13 節)

・「キリスト者の自由」を語ってきたパウロは、ここでその実践的内容に踏み込んでいきます。福音書の中には、イエス様とファリサイ派や律法学者たちが対立する場面がしばしばみられました。

・たとえば安息日に病気の人をいやしたイエス様に対して、「そういうことを安息日にしてはいけない」とファリサイ派たちは批判します。その言葉の先には、病気をいやされて喜んでいる人の姿は見えていないのです。

・律法のような決まりはときに、人を批判し排除する道具になっていきます。わたしたちの教会にも、同じようなことがあるかもしれません。そうではなく自由になったわたしたちは、愛をもって互いに仕えあうことが大切なのです。神さまがわたしたちを愛されたように。

(12月 27日)「ガラテヤの信徒への手紙 5: 16~21」

わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。

(ガラテヤの信徒への手紙 5 章 16 節)

・パウロは自己中心的に生きる姿を、「肉」と表現していきます。その具体的な業を、パウロは列記していきます。「姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもの」。

・自分には関係ないと思えるものもあれば、「怒り」など日常の中で身近に感じるものもあります。それらの「肉の望むところ」から離れて、「霊の望むところ」に身を置きなさいということなのでしょう。

・しかしそれは、自分の力だけでおこなうことはできません。奈良基督教会では 12 月 15 日と来年 1 月 5 日に洗礼式があります。その際に志願者は何度も答えます。「神の助けによって」。自分の弱さを知り、神さまの助けを求める。これが大切なことなのです。

(12月 4日)「コリントの信徒への手紙二 13: 1~4」

なぜなら、あなたがたはキリストがわたしによって語っておられる証拠を求めているからです。キリストはあなたがたに対しては弱い方でなく、あなたがたの間で強い方です。

(コリントの信徒への手紙二 13 章 3 節)

・パウロは、「わたしがあなたがたのところに行くのは、これで三度目です」と繰り返します。仏の顔も三度という言葉があります。「今度そちらに行ったら、容赦しません」というパウロの言葉には、強い警告の思いがあるようです。

・パウロは一度目の訪問で教会をたてましたが、二度目の訪問でコリントの状況に心を痛めました。その悲しみと怒りの中で、この手紙は書き記されました。彼はコリントの人たちに、悔い改めを求めます。

・しかし一方で「キリストはあなたがたの間で強い方です」とも語ります。イエス様は十字架の前に弱くされました。しかし復活され、わたしたちは命を与えられました。弱さの中で本当の強さを与えられたことを思い返しなさいということかもしれません。

(12月 5日)「コリントの信徒への手紙二 13: 5~10」

わたしたちは自分が弱くても、あなたがたが強ければ喜びます。あなたがたが完全な者になることをも、わたしたちは祈っています。

(コリントの信徒への手紙二 13 章 9 節)

・パウロはコリントの人たちに対して、「自分を吟味しなさい」と語ります。自分を吟味したときに、自分の心の中にはイエス様がいてくださると信じていることができた人を、パウロは「適格者」と呼びます。

・わたしたちは「適格者」でしょうか。わたしたちは日々の歩みの中で、何度も戸惑い、イエス様を見失います。自分の力だけで生きているという思いも持ちます。しかしそこに、いつもイエス様が共にいてくださることを覚えていきたいものです。

・わたしたちは自分の力だけで、「完全な者」にはなりえません。神さまの恵みによって、そしてお互いが欠点を補い合い歩んでいくことによって、わたしたちは「完全な者」とされていくのです。

(12月 6日)「コリントの信徒への手紙二 13:11~13」

聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい。すべての聖なる者があなたがたによろしくとのことです。

(コリントの信徒への手紙二 13章 12節)

- ・コリントの信徒への手紙二も今日で最後です。昨日までの文体と打って変わって、とても穏やかな文章になっています。パウロはコリントの人たちに対して、様々な言葉を用いて励まします。
- ・そして最後には、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」という祈りが書かれます。この言葉は礼拝だけでなく様々な会合などにおいても、「祝福」として用いられることがあります。
- ・どんなに意見がぶつかり合っても、三位一体の神との交わりを感じ、教会が一致に向かって進んで行くことを覚えるのです。これから祝福が祈られるときには、どうぞそのことを感じてください。

(12月 7日)「ガラテヤの信徒への手紙 1:1~5」

人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、

(ガラテヤの信徒への手紙 1章 1節)

- ・今日から月末まで、ガラテヤの信徒への手紙を読み進めていきます。この手紙もパウロによって書かれたものです。パウロは三回の宣教旅行の中でこの地を訪れ、教会共同体をつくっていきました。
- ・ただ他の手紙と同様に、ガラテヤの人々も「偽教師」によって惑わされ、正しい福音からそれたという現実があったようです。そこでパウロは軌道修正するために、この書簡を送ったと言われます。
- ・この手紙では、福音が丁寧に語られていきます。わたしたちもこの手紙を読みながら、神さまから送られた福音(グッドニュース)に触れていくことができればと思います。楽しみながら読んでいきましょう。

(12月 24日)「ガラテヤの信徒への手紙 4:28~31」

要するに、兄弟たち、わたしたちは、女奴隷の子ではなく、自由な身の女から生まれた子なのです。

(ガラテヤの信徒への手紙 4章 31節)

- ・一方サラには、神さまからの約束によってイサクが与えられました。奴隷の子イシュマエルと自由の子イサク。このような構図で書かれることに違和感はありますが、ユダヤ人にとってこの二人とその子孫の確執は大きなものでした。
- ・聖書にはイシュマエルがイサクを「からかった」事件が書かれていますが、ユダヤ教にはイシュマエルがイサクを、弓矢遊びを装って殺そうとした伝承が残されています。パウロはその伝承も頭に入れながら、このようなたとえを語ったのでしょう。
- ・パウロがここで言いたかったのは、わたしたちは律法に奴隷のように支配されているのではなく、自由なのだということです。たとえの使い方には疑問が残りますが、「キリスト者の自由」という大命題が明日から語られていきます。

(12月 25日)「ガラテヤの信徒への手紙 5:1~6」

律法によって義とされようとするなら、あなたがたはだれであろうと、キリストとは縁もゆかりもない者とされ、いただいた恵みも失います。

(ガラテヤの信徒への手紙 5章 4節)

- ・クリスマスおめでとうございます。クリスマスは、救い主イエス様がわたしたちのためにお生まれになった日です。その日にわたしたちは、パウロの書いた厳しい勧告に耳を傾けます。
- ・「もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります」という言葉は、割礼とは縁遠いわたしたちには響かないかもしれませんが。しかし「割礼」ではなく、「何かに寄り頼むこと」で義とされようとしているのならどうでしょうか。
- ・お金、名誉、地位、また自分の力に頼ってわたしたちが義とされようとするのであれば、イエス様は必要ないのです。神さまの前に自分で立てるのであれば、イエス様に来ていただくなくてもいいのです。降誕日の今日だからこそ、心に留めていきましょう。

(12月 22日)「ガラテヤの信徒への手紙 4: 12~20」

できることなら、わたしは今あなたがたのもとに居合わせ、語調を変えて話したい。あなたがたのことで途方に暮れているからです。

(ガラテヤの信徒への手紙 4 章 20 節)

- ・12 節前半にある「わたしもあなたがたのようになったのですから」というのは、パウロが律法を手放したという意味です。しかしガラテヤの人々は以前のパウロのように、律法を守ることによって信仰が満たされると考えるようになってきました。
- ・パウロはもう一度、自分がガラテヤに行った時のことを思い出してほしいと願います。パウロは「体が弱くなったことがきっかけで」と書きます。これはパウロの目が病気にかかったことではないかと言われています。
- ・そのパウロに対してガラテヤの人々は、自分の目をえぐりだしてパウロに与えようとしたというのです。現実的にそれで目が治ることはないとしても、パウロはその心がとてもうれしかったでしょう。そのときの語調に戻したい。パウロはそれを願います。

(12月 23日)「ガラテヤの信徒への手紙 4: 21~27」

これには、別の意味が隠されています。すなわち、この二人の女とは二つの契約を表しています。子を奴隷の身分に産む方は、シナイ山に由来する契約を表していて、これがハガルです。(ガラテヤの信徒への手紙 4 章 24 節)

- ・パウロはここから旧約の二人の女性を用い、たとえを語ります。今日登場するのはイシュマエルの母、ハガルです。彼女はアブラハムの妻サラの女奴隷でしたが、子を産めないサラに代わってアブラハムの子を産みます。それがイシュマエルです。
- ・彼女はイシュマエルを身ごもったとき、サラの元から一旦逃げましたが、シナイで幻を見て戻ってきます。しかし後にイシュマエルと共にアブラハムの元から追い出され、シナイの荒れ野があったアラビアに住み着くことになります。
- ・パウロはハガルが奴隷であったこと、そしてシナイで律法が与えられたことを結びつけてます。今のエルサレムはその子どもたちと共に奴隷になっていると語るのです。「律法の鎖から抜け出せない人たち」をそのようにたとえていくのです。

(12月 8日)「ガラテヤの信徒への手紙 1: 6~10」

ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを感らし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。

(ガラテヤの信徒への手紙 1 章 7 節)

- ・パウロの他の手紙では、あいさつの後に感謝や賛辞が書かれることがほとんどでした。しかしこの手紙では、いきなり本題に入っていきます。パウロには、「必ず伝えなければ」という熱い思いがあったようです。
- ・パウロが怒っているのは、「ほかの福音」に人々が簡単に乗り換えようとしていることでした。しかもそれは、「福音」とは呼べないもののようです。それが何なのかは、後ほど語られていきます。
- ・ただパウロの言葉に「呪われるがよい」という文字が二度出てくるのは少し怖い気がします。わたしたちが誰かから手紙を受け取ったとき、あいさつのあとにこのような言葉が並ぶと、震えあがってしまいそうです。

(12月 9日)「ガラテヤの信徒への手紙 1: 11~17」

あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。

(ガラテヤの信徒への手紙 1 章 13 節)

- ・パウロはしばしば、手紙の中で自分自身の召命について語ります。それは彼が元々キリスト教に対する迫害者であり、またイエス様の直接の弟子でもなかったからです。「彼は何様だ」とよく言われていたのでしょう。
- ・パウロはしかし、自分はイエス様から啓示を受けたのだとはっきり伝えます。また神さまがイエス様を自分に示して、異邦人(外国人)の元に福音を告げ知らせるように遣わしたのだと言うのです。
- ・わたしたちも誰かが間に入ってイエス様と結ばれているわけではありません。神さまはわたしたち一人一人のためにイエス様を遣わし、イエス様はわたしたちと直接つながっているのです。つまりわたしたちも、イエス様の直弟子なのです。

(12月10日)「ガラテヤの信徒への手紙1:18~24」

わたしがこのように書いていることは、神の御前で断言しますが、うそをついているではありません。
(ガラテヤの信徒への手紙1章20節)

- ・パウロがダマスコで回心をして三年後、彼はエルサレムに行きケファと知り合いになろうと考えます。ケファとはシモン・ペトロのことです。ペトロはエルサレム教会の指導者として活動していました。
- ・パウロはなぜペトロに会いに行ったのでしょうか。使徒として活動するための許可を取ろうとしたのでしょうか。しかしたった二週間の滞在だけでは、たいしたことはできなかったかもしれません。
- ・ただパウロは、自分が啓示された福音の正当性を認めてもらいたかっただけかもしれません。当時異邦人に宣教することは、エルサレム教会にとってなかなか理解できないことでした。しかしその必要を、パウロは熱く語ったのでしょう。

(12月11日)「ガラテヤの信徒への手紙2:1~5」

その後十四年たってから、わたしはバルナバと一緒にエルサレムに再び上りました。その際、テトスも連れて行きました。
(ガラテヤの信徒への手紙2章1節)

- ・パウロは続けて、自分の使徒であることと共に、自分が伝える福音の正当性を語ります。「その後14年たってから」エルサレムに上ったのは、使徒言行録15章にある「エルサレム使徒会議」に出席するためでした。
- ・その会議の中で大きな議題となったのは、異邦人と呼ばれるユダヤ人以外の人たちがキリスト者になる際に、割礼が必要かどうかということでした。割礼はアブラハムの時代に始まり、ユダヤ人のアイデンティティとして大切にされてきました。
- ・使徒会議の中で、異邦人には割礼を施す必要はないとされます。その証拠に、同行した異邦人テトスは割礼を受けませんでした。その「自由」が保証されていたはずだと、パウロは語ります。しかしその福音の自由がガラテヤにおいて、脅かされているのです。

(12月20日)「ガラテヤの信徒への手紙4:1~7」

ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。
(ガラテヤの信徒への手紙4章7節)

- ・神さまの救済計画をパウロは語ります。わたしたちにとって遠い話に聞こえるかもしれませんが、この神さまの決断がなかったらわたしたちに救いが与えられなかったと考え、とても大切なことです。
- ・イエス様が来られたことによって、わたしたちは奴隷ではなく神の子にされたとパウロは書きます。律法に監視され、自由を奪われていた頃の人間は、まさに奴隷と呼ばれる存在でした。
- ・それが神の子とされる。主の祈りでわたしたちは「天におられるわたしたちの父よ」と唱えます。神さまのことを「アッパ(お父ちゃん)」と呼ぶことができる喜びを、かみしめていきたいと思えます。

(12月21日)「ガラテヤの信徒への手紙4:8~11」

あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っています。
(ガラテヤの信徒への手紙4章10節)

- ・パウロが今日書いている内容は、「信仰の逆戻り」と言ってもいいかと思えます。わたしたちも、一度信仰に入ったものの、また元に戻ってしまうことがあると思います。ただそれは神さまにではなく、教会に原因があることも多いようですが。
- ・「信仰」は目に見えないものだけに、「このままで良いのだろうか」と不安を覚えてしまいます。ユダヤ教の人たちは、過越祭や仮庵祭など様々な祭りを大切にしてきました。また安息日や断食日などもきちんと守ってきました。
- ・そのように何かをすることによって、神さまに向かおうとしてきました。しかしわたしたちは自分の力で神さまを知ったのではなく、神さまから知られていたのです。神さまが一方向的にわたしたちを愛してくださった、それが信仰の原点であることを忘れずにいましょう。

(12月18日)「ガラテヤの信徒への手紙3:21~25」

信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。

(ガラテヤの信徒への手紙3章23節)

- ・パウロは神さまの救いの計画を語っていきます。それは律法という神さまから与えられたものが決して無駄なものではなく、わたしたちにとっても大きな意味を持つものであることを示すためです。
- ・「律法はわたしたちをキリストのもとへ導く養育係」であるとパウロは書きます。養育係とは当時子どもに行儀作法をしつける役割を持っていた人のことで、奴隷や元奴隷がその任を負っていました。
- ・つまり律法があることによって、「わたしたちはこのままではダメだ」という気持ちを起こさせ、イエス様へと目が向けられる。そしてイエス様を心に迎え入れることによって、救いがもたらされる。クリスマスを前にしたこの時期にこそ、心に留めたいことです。

(12月19日)「ガラテヤの信徒への手紙3:26~29」

そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。

(ガラテヤの信徒への手紙3章28節)

- ・わたしたちは洗礼を受けることを、「キリストを着る」と表現することがあります。その言い方は、この箇所からきています。わたしたちは洗礼を受けたからといって、人格や性格が変わるわけではありません。
- ・また洗礼を受けた翌日から罪をまったく犯さなくなるかという、そうでもありません。わたしたちは罪に汚れた身体のまま受け入れられ、そのままの姿で歩むことを許されているのです。
- ・つまりわたしたちがどんな者であろうとも、神さまには関係ないのです。民族や身分、地位や性別などを超えて、神さまの救いはもたらされます。だからわたしたちは、すべての違いを超えて神さまの元の一つになれるのです。

(12月12日)「ガラテヤの信徒への手紙2:6~10」

ただ、わたしたちが貧しい人たちのことを忘れないようにとのことでしたが、これは、ちょうどわたしも心がけてきた点です。

(ガラテヤの信徒への手紙2章10節)

- ・エルサレムの使徒会議を経て、ペトロたちは割礼を受けている人々(ユダヤ人)に、パウロやバルナバは割礼を受けていない人々(異邦人)に福音を伝えていくことになりました。そこには何の上下関係などありません。
- ・「神は人を分け隔てなさいません」という言葉は、「神は人を偏って見ることはない」という意味です。旧約聖書には、救いはまずユダヤ人に訪れるという考え方がありました。そこからユダヤ人の「選民思想」も生まれていきます。
- ・しかし「新しい契約(新約)」においては、救いはイエス様を通してすべての人に同じように与えられるとされます。わたしたちの中には「選民意識」はないでしょうか。わたしたちは神さまの憐れみによって、ただ一方的に呼ばれたのです。

(12月13日)「ガラテヤの信徒への手紙2:11~14」

なぜなら、ケファは、ヤコブのもとからある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに、彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしだしたからです。

(ガラテヤの信徒への手紙2章12節)

- ・シリアのアンティオキアで、一つの事件が起こります。異邦人と一緒に食事をしてきたケファ(ペトロ)が、エルサレムの指導者であったヤコブの元から人が来た途端、食卓を囲むことに対してしり込みしたというのです。
- ・ユダヤ教には食物規定があり、食べてはいけない物が細かく決められ、さらに食事の相手も制限されていました。罪人や異邦人と一緒に食事をしてはいけないのです。ただペトロは使徒言行録10章で異邦人との間にある壁は乗り越えたはずでした。
- ・ここでの食事は、聖餐式を意味しています。そのような大切な食卓から、神さまが選んだ人たちを排除する。パウロにはそれがゆるせませんでした。ただペトロの微妙な立場も理解できます。「正論を言われても」と困惑したことでしょう。

(12月14日)「ガラテヤの信徒への手紙2:15~21」

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。

(ガラテヤの信徒への手紙2章20節)

- ・パウロはここで、神さまとの正しい関係について語ります。「生まれながらのユダヤ人」というのは、選ばれた民として神さまとの特別の関係にある、いわば特権的な地位をもつ人のことです。
- ・しかし神さまは、選ばれた人たちが律法を遵守することによって救われるというやり方をあきらめました。なぜなら人は誰一人として、思いと言葉と行いによって律法を完全に守ることができないからです。
- ・人が義とされる唯一の道は、イエス様を信じて受け入れることです。そこにはユダヤ人も異邦人も関係ありません。そしてわたしたちに対しても、救いの道が開かれたということなのです。

(12月15日)「ガラテヤの信徒への手紙3:1~6」

それは、「アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた」と言われているとおりで。

(ガラテヤの信徒への手紙3章6節)

- ・2000年前の人々と違い、わたしたちは「律法」と言われてもなかなかピンときません。割礼や十戒など、身近に感じる人はほとんどいないでしょう。だからパウロの言う「信仰による義」を受け入れることはたやすいのかもしれません。
- ・しかし何かをしなければ信仰に入ることができない、信じた後もこういうことをしなければならないというような考え方はどこかにあります。それは「何もしない」と心配になってしまうからです。
- ・ガラテヤの人たちも、福音をただ信じて霊を受けました。しかし割礼を受けることによって、肉による仕上げをしようとしたのです。パウロはそのようなものが必要ない証拠として、アブラハムを例にあげて説明していきます。

(12月16日)「ガラテヤの信徒への手紙3:7~14」

律法によってはだれも神の御前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。

(ガラテヤの信徒への手紙3章11節)

- ・アブラハムのことを、「信仰の父」と呼ぶことがあります。それは昨日の箇所にあるように、「アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた」からです。信仰によって義とされたのです。
- ・それに対して律法は、わたしたちに絶望を与えます。それは神さまの前に正しくあり続けることなどできないからです。律法を絶えず守ることができないならば、わたしたちは呪われるというのです。
- ・イエス様の十字架は、わたしたちをその「律法の呪い」から贖い出したのだとパウロは書きます。律法の呪いを一身に受け、十字架上で血を流すことによって、律法の鎖を断ち切られたのです。わたしたちは神さまの前に、律法からの自由を与えられたのです。

(12月17日)「ガラテヤの信徒への手紙3:15~20」

では、律法とはいったい何か。律法は、約束を与えられたあの子孫が来られるときまで、違犯を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです。

(ガラテヤの信徒への手紙3章19節)

- ・アブラハムの信仰が義とされたとき、まだ律法は与えられていませんでした。神さまは律法を出エジプトの際に、荒野でモーセに与えられました。それはアブラハムの出来事から430年も後のことです。
- ・だからアブラハムとの契約が律法に勝るとパウロは言うのですが、それでは律法は何のために定められたのでしょうか。その疑問に対してパウロはこのように答えます。一つは罪を自覚させるためです。
- ・律法を本当の意味で守ることのできない自分に気づき、「約束を与えられたあの子孫」であるイエス様が来られることを待ちわびる。これがわたしたちに与えられた、唯一の希望なのです。